

アルベルト・メルッチの惑星社会論と身体への問いかけ
——「内なる惑星」概念をめぐる——

新 原 道 信*

**Alberto Melucci's Vision of the Planetary Society
and the Asking Questions of the Body:
On the Concept of 'Inner Planet'**

NIIHARA Michinobu

How can we create the “wisdom of coexistence (*saggezza di convivenza*)” that is perceiving and sympathizing to the cries of the earth, of other creatures and of other human beings? How can we bring out (*hervorbringen*) the “composite wisdom to facing and being with raw reality (*cumscientia ex klinikós*)” that are responding for/to the fundamental problem on the *planetary society*?

How can we grasp that the planet Earth is like a speck of dust floating in the great ocean of cosmos, and the societies are like an “archipelago”, floating in this planet?

The structure and dynamics of the planetary societies are not always “clear and distinct” and are difficult to perceive. The planetary societies form a coherent organism and compositeness. The fundamental problem of the planetary society behind the global issues exist as a “fluid” that is difficult to disassemble, separate and analyze. However, Melucci believed that because of this, there is also the possibility of creating a new society from the inner “movements (*becomings, metamorfosi*)” of the individual corporeality in the small place (here and now) to which ordinary simple people belongs.

Melucci began to develop a new vision through the concepts, 《planetary society/inner planet》and 《planet earth/body》. Just as he was beginning to develop his vision of a planetary society, he died too young in September 2001.

This paper examines the ‘asking questions’ of the body, an important element of Melucci’s vision of planetary society, with a focus on the concept of the ‘inner planet’.

This reflection is based on a dialogue with Alberto Melucci, Alberto Merler, Anna Fabbrini-Melucci.

* 中央大学文学部教授

キーワード：惑星社会，惑星地球，内なる惑星，身体，カタストロフ，エコロジー，うごき，比較学，メルッチ，メルレル

【目次】

1. はじめに——惑星社会と「内なる惑星」
2. 現代社会において「内なる惑星」を問うことの意味
3. エコロジーと「内なる惑星」
4. 身体のシグナル，メッセージを聴く
5. 「内なる惑星」に住むことの“責任／応答力”——ジレンマを名付ける
6. おわりに——惑星社会の劇的収支決算による債務相続者の学問へ

近年，自然の問題が，メディアや巷の注目を集めている．天然資源や私たちを取り巻くエコシステムの保護と保全というかたちで，自然の問題は，すでに政治市場における常套手段となり，市場取引の手っ取り早い (*tout court*) 手札としての地位を確立している．しかし，環境に関するイシューが大規模に流通するようになったといえども（そのことのアンビヴァレンスを忘れるべきではないが），これらのイシューに対する私たちの意識は，人類の物理的社会的な生息地である惑星の将来に限定されている．つまり，環境主義者が声高に語る脅威や訴え，プロジェクトの背後で私たちが心を奪われているのは，「外にある惑星 (external planet)」なのである．

しかし，根底からの変容のプロセスに巻き込まれている惑星には，もう一つの惑星がある．すなわち，私たちの体験や関係の基盤をなし，生物学的，情動的，認知的構造からなるところの，内なる惑星 (inner planet) である．私たちは，外的な惑星に対して思案するのと同様に，この内なる惑星にも関心を持つべきである．なぜなら，個人の生と種の未来という双方の観点から見て，内なる惑星に開かれた可能性とそれがさらされている危険性が，決定的に重要なレベルに達しているからである．

A. メルッチ「内なる惑星」『プレイング・セルフ——惑星社会における人間と意味』より¹⁾

1) Alberto Melucci, *The Playing Self: Person and Meaning in the Planetary Society*, New York: Cambridge University Press, 1996 (=新原道信・長谷川啓介・鈴木鉄忠訳『プレイング・セルフ——惑星社会における人間と意味』ハーベスト社，2008年，80-81頁)．以下，引用の場合は，Melucci 1996 = 2008 という略号を使用する．

1. はじめに —— 惑星社会と「内なる惑星」

本稿は、中央大学社会科学研究所のヨーロッパ研究ネットワーク²⁾を母体として着手された共同研究チームである「うごきの比較学」の2023年度の研究成果の一部である。研究チーム「うごきの比較学」は、イタリアの社会学者アルベルト・メルレル (Alberto Merler) の“社会文化的な島嶼性論 (visione di insularità socio-culturale)” と、アルベルト・メルッチ (Alberto Melucci) の“惑星社会と内なる惑星論 (vision of planetary society and the inner planet)” を、社会認識の“基点/起点 (anchor points, punti d'appoggio)”³⁾としている。

メルレルは、地球規模のひとの移動によって、「自分」とは異なる経験と理解の在り方——歴史や文化、自然観、宗教、生活の哲学、倫理的価値観、死生観、経済観念、政治の感覚など——をもった“移動民 (homines moventes)” の“衝突・混交・混成・重合の歩み (percorso composito, composite route)”によって、社会がつくられるという見方を提示した。メルレルによれば、グローバリゼーションは、個々の社会や文化の画一化・単一化をおしすすめると同時に、「混交、混成、重合」した複合的身体を有する“移動民 (homines itinerantes, homines moventes)”を、眼前に登場させ、規格化・均質化・画一化の夢を打ちくだく」プロセスでもある。「そのあくなきシステム化からすり抜け、染みだし、内側から異化するところの“複合性、混交し混成する重合性”」は、「分厚い実質と構造をもって、より現実的な意味をもつ」ようになるとする⁴⁾。惑星地球規模のグローバル社会は、メタファーとしての「多島海 (arcipelaghi, il mare con le tante isole)」——“複合・重合性 (compisitezza, compositeness)”をもった“移

2) 1996年より継続しているヨーロッパ研究ネットワークと、同ネットワークを母体とする共同研究チームである「3.11以降の惑星社会」(2013～2015年度)、「惑星社会と臨場・臨床の智」(2016～2018年度)については、新原道信「フィールドワークの“想像/創造力”——惑星社会の諸問題に応答する“うごきの比較学” (3)」『中央大学社会科学研究所年報』26号、2022年、31-57頁を参照されたい。

3) “基点/起点 (anchor points, punti d'appoggio)”は社会と個々人が根本的な変容にさらされ、自ら“(軸足をずらし) 揺れうごきつつかたちを変えていく (playing and changing form)”ときの「錨をおろせる場所」, “うごき (becomings, metamorfosi)”のなかでの“不均衡な均衡点 (punti di simmetria asimmetrica, asymmetrical symmetry points)”である。たとえて言えばアーチェリーで矢を放つときにかまえを安定させるための“動的な均衡点 (punti di equilibrio dinamico, dynamic equilibrium points)”であり, “うごき”のなかにあるものがさらにうごいていくなかで錨をおろす場所, 流動する“根”, “うごき”の萃点である。

4) Alberto Merler, *Mobilitade humana e formação do novo povo / L'azione comunitaria dell'io composito nelle realtà europee: Possibili conclusioni eterodosse*, 2004 (=新原道信訳「世界の移動と定住の諸過程——移動の複合性・重合性から見たヨーロッパの社会的空間の再構成」新原道信他編『地域社会学講座 第2巻 グローバリゼーション/ポスト・モダンと地域社会』東信堂, 2006年, 74頁)。

動民”の“複合的身体 (corpo composito)”がつくる“社会文化的な島々 (isole socio-culturali)”のつらなり——として、捉え直される。メルレルの〈社会文化的な島々／複合的身体論〉⁵⁾は、近代の社会認識に対して新たな見方 (visione) を提示する試みとなっているが、本稿では、メルレルと同じく新たな社会認識を提示したメルッチの〈惑星社会／内なる惑星論〉に、議論を限定する。

メルッチは現代社会をどう見ているのか？メルッチによれば、今日の社会は、「外部の環境および私たちの社会生活そのものに介入していく力によって、完全に相互に結合していく社会」である。しかし依然として、「そのような介入の手が届かない本来の生息地 (natural home) である惑星としての地球 (the planet Earth) に拘束されているような社会」でもある。そして「社会的行為のためのグローバルなフィールドとその物理的な限界 (physical boundary) という、惑星としての地球の二重の関係」によって規定されている惑星社会 (società planetaria, planetary society) であるとした⁶⁾。

「介入」による「結合」の全面的・全方位的な展開により、「国々や文化はグローバル・システムの内的次元として存在するのみ」⁷⁾である。人類の「本来の生息地である惑星地球 (its natural home, the planet Earth)」を「征服の地」⁸⁾とすることで、「個人の行為に対して可能性に開かれた沃野を提供してきた近代世界」の「システムはもはや不可逆的な勢いで惑星全体を包摂するようになり、未来の見通しはカタストロフの恐れで被われていることから、数々の救済神話をもつ楽観論は、根本から成り立たなくなっている」⁹⁾。そしていま、「征服」すべき「外部」を消失した社会は、地球規模の「限界 (boundary)」に直面している¹⁰⁾。すなわち、「グローバルなフィールドとその物理的な限界」の二重性、「アンビヴァレンス (ambivalence)」である。

問題は、人間と社会の在り方 (ways of being) に内在する問題である。にもかかわらず、「環境」「エコロジー」といったイシューは、マクロかつグローバルで「外にある／外なる (external)」もの、「問題解決 (problem-solving)」の対象として設定されている。この思考態度 (mind-set) に対して、メルッチは、臨床心理的な療法的実践の経験から、「解決主義的実

5) メルレルの理論については新原道信「A.メルレルの“社会文化的な島々”から世界をみる試み——“境界領域の智”への社会学的探求 (1)」『中央大学文学部紀要』社会学・社会情報学27号 (通巻268号)2017年、73-96頁を参照されたい。

6) Melucci 1996 = 2008, 3頁。

7) Melucci 1996 = 2008, 175頁。

8) Melucci 1996 = 2008, 84-86頁。

9) Melucci 1996 = 2008, 59頁。

10) 現代社会が抱える地球規模の「限界」については、新原道信「A.メルッチの『限界を受け容れる自由』とともに——3.11以降の惑星社会の諸問題への社会学的探求 (1)」『中央大学文学部紀要』社会学・社会情報学24号 (通巻253号)2014年、46頁を参照されたい。

践 (resolutive practice)』とは異なるアプローチである「聴くこと (listening)」に着目した¹¹⁾。さらには、極度に相互に依存し作用する複合・重合社会においては、個々人の身体レベルでの「諸関係の微細な網の目」の動態のなかに、惑星地球規模の問題が内在していることへの着目が何よりも重要だとした。

それゆえ、本稿冒頭の引用にあるように、惑星地球規模となった社会そのものと同様に、根底からの変容のプロセスに巻き込まれている「内なる惑星 (pianeta interno, inner planet)」から考えること、自らの身体と対話し声を「聴くこと」がいまこそ求められている。私たちの体験や関係の基盤をなし、生物学的、情動的、認知的構造からなるところの「内なる惑星」をめぐる選択と意志決定の問題を考えることから、グローバル社会で生起する地球規模の 이슈 (global issues) の背後に在る“根本問題 (fundamental problem, problema fondamentale)”を切り出すことを試みようとしたのである。

しかしながら、メルッチは、〈惑星社会／内なる惑星〉、〈惑星地球／身体〉という“対位的 (contrapuntal, polyphonic, and disphonic)”な概念装置による人間と社会の新たな見方 (visione) を展開し始めたところで、白血病となり、2001年9月に早逝した¹²⁾。

惑星社会の構造と動態は必ずしも「明晰」「判明」ではなく、知覚することも難しい。惑星社会は、きわめて“複合・重合”的な、ひとつのまとまりをもった有機体として形成されている。グローバル・イシューの背後の惑星社会の“根本問題”は、分解・分離・分析困難な“流体 (fluido)”として存在している。しかしそれゆえに、自分が属している小さな場 (いまここで)、個々人の身体の内なる“うごき (becomings, metamorfosi)”から新たな社会を創り始める可能性を秘めてもいるとメルッチは考えた¹³⁾。

本稿ではメルッチの惑星社会論の重要な要素である身体への“問いかけ (interrogazione, asking questions)”についての検討を、「内なる惑星」概念を中心におこなう。本稿は、社会科

11) メルッチの「聴くことの社会学」については、2000年5月の地域社会学会大会における日本での講演に基づく論稿である、Alberto Melucci, “Sociologia dell’ascolto. Sociology of Listening, Listening to Sociology”, 2000 (=新原道信訳「聴くことの社会学」地域社会学会編『市民と地域——自己決定・協働その主体 地域社会学会年報13』ハーベスト社, 2001年, 1-14頁)を参照されたい。以下、引用の場合は、Melucci 2000 = 2001 という略号を使用する。

12) メルッチ自身が自らの身体の声を「聴く」ことでどのように新たな社会理論を展開しようとしたのかについては、新原道信「生という不治の病を生きるひと・聴くことの社会学・未発の社会運動——A.メルッチの未発の社会理論」東北大学『社会学研究』第76号, 2004年, 99-133頁, 新原道信「A.メルッチの“未発のリフレクション”——痛むひとの“臨場・臨床の智”と“限界状況の想像／創造力”」矢澤修次郎編『再帰的=反省社会学の地平』東信堂, 2017年, 105-141頁などを参照されたい。

13) メルッチが亡くなる直前に故郷リミニでおこなわれた講演を参照されたい。Melucci 1996 = 2008, vii頁。

学研究所の共同研究として実現した学術シンポジウムに基づく研究叢書『地球社会の複合的諸問題への応答の試み』（新原道信・宮野勝・鳴子博子編著，中央大学出版部，2020年）の新原道信による序章「“惑星／地球／社会”の複合的諸問題への応答の試み——なぜいま社会科学を“惑星／地球／社会”から始める必要があるのか」の内容を深めるという位置づけを持っている。

2. 現代社会において「内なる惑星」を問うことの意味

グローバル・システムの時代においては、「外部」は消失し，社会はひとつのローカル・コミュニティ，破滅の危機を共有する運命共同体となってしまうている。国家や地域といった境界線で内と外を峻別することを前提とした二分法概念——〈社会／個人〉〈マクロ／ミクロ〉〈中心／周辺〉〈身／心〉などでは，いま起こっている現象は捉えきれない。これに対して，〈惑星社会／内なる惑星〉，〈惑星地球／身体〉という社会認識の〈エピステモロジー〉を構想したメルッチは，この新たな「見方（visione）」への理解をどのように伝えようとしたのだろうか。

本章では，1997年2月にスウェーデン・ルンド大学で開催されたワークショップ「遺伝子技術は市民にどう受けとめられているか（Public Reception of Gene Technology）」にメルッチが寄稿した論文である「自然という社会的産物——遺伝子技術，身体，新たなコンフリクト（The Social Production of Nature. Gene Technology, the Body, and New Conflicts）」¹⁴⁾を考察の対象とする。

本論文は，遺伝子技術に関する学際的な集会への寄稿である。メルッチの主たる学問分野である社会学や臨床心理学，精神心理療法分野とは異なる scientific audience を読者として想定し，根本的な変容に直面している現代社会と人間の問題を，身体から問うことの意味について書かれている。鳥瞰図的な広がりをもつ書き方がなされると同時に，「内なる惑星」というメルッチ固有の概念を登場させ，問題の所在についての思考を深化させることが試みられている。以下では，同論文を検討し，現代社会において「内なる惑星」を問うことの意味を確認していく。

全体の章構成は，Where is Nature?, Colonizing or Inhabiting Life, Co-living and Responsibility, New Conflicts, Putting the Boundaries となっている。Co-living and Responsibility, Boundaries など，メルッチ固有の概念も使用しつつ，遺伝子技術に代表される諸科学や人間の諸活動によって，自然および人間の身体の内なる「介入」が激化することで，新たな社会的コンフリクト

14) Alberto Melucci, “The Social Production of Nature”, in S. Lundin and M. Ideland (eds.), *Gene Technology and the Public. An Interdisciplinary Perspective*, Lund: Nordic Academic Press, 1997, pp. 58-70. 同論文については下記の訳書が存在している。村岡潔訳「社会的産物としての自然——遺伝子技術，身体，新たな自然のジレンマ」栗屋剛・岩崎豪人他訳『遺伝子工学と社会——学際的展望』溪水社，2012年，57-70頁。訳文は村岡訳を尊重するが基本的には筆者が原書より訳出している。以下，引用の場合は，Melucci 1997 という略号を使用する。

が生じていることを読者に伝えようとしている。

この論文の冒頭では、自然 (Nature) についてのメルッチの「見方」が提示される。「科学的な知識と技術」による「私たちの自然環境と生物学的構造への介入」——「今日の複雑社会では」(独自の用語である「惑星社会」は使用していない)、「自然が文化的に解釈された現実」となっていること(「自然」の「文化・化」)——について述べている。いまや人類は、自然を生み出したり破壊したりする力、自らの自然の根源 (its own natural root) に働きかけるリフレクシヴな力を獲得した。ここでの「リフレクシヴ」とは、人間の諸活動、個々人の諸行為の結果が、惑星地球の状況の変化として照りかえってくる、自分にもどってくる(再帰する)ことの指摘である。「グローバルなフィールド」の全面的・全方位的な展開は、かえってその「限界 (boundary)」への接近として照りかえってくるのである。

そのため現代人は、自らが手にしてしまった「生み出す (produce) と同時に際限なく破壊する力」に対して、自らの「限界 (own limits)」を定める必要がある。いま問題となっているのは、「私たちは生きのこるのか、カタストロフをこうむるのか、私たちの限界 (our limitations) を受け入れるのか、拒否するのか、克服するのか」である。すなわち、「自然」を選択し、「創造 (create)」する必要に迫られている¹⁵⁾。ここでの「自然」は、その力に身を委ねる相手でも、「操作」の対象でもない。すでに「文化・化」してしまった「自然」に対する“責任／応答力 (responsibility)”が問われている。

さらには、「内なる惑星」の「創造」が始まったこと、この「内なる惑星」を私物化する (appropriate) ことで新たな社会的コンフリクトが生まれることが指摘される。「内なる惑星」に個として住む (inhabiting) 可能性と同時に、身体への「介入」「植民 (colonizing)」によって個としての境界が浸食されてもいる。ここでの身体は、(身心二元論を前提とする)「心の命令で働く機械」ではない。身体は、私たち自身の内なる自然と私たちが居住する自然との間の「関係性の媒体 (relational vehicle)」である。そこでの個々人は、「内なる惑星を保護し開発し、植民者と闘う」必要があり、そうすることで自らの経験の領域に豊かな知識を取り込むことを可能にする。

すなわち、「内なる惑星」への「敬意を持ち非暴力で開墾する」ことで、自覚的に(トータルな身体を)生きることになるのである¹⁶⁾。この自覚的な生 (inhabiting, co-living) には、個の意志決定の尊厳を保ちつつ、他の種、他の生命、宇宙と結びつける「倫理」¹⁷⁾が必要となる。

15) Melucci 1997, 58 頁。

16) Melucci 1997, 59-61 頁。

17) Melucci 1997, 59-62 頁。「倫理」については『ブレイング・セルフ——惑星社会における人間と意味』(Melucci 1996 = 2008, 178 頁)で下記のように述べている。

倫理はもはや究極目的の確実性を提示できるようなものではなく、それ自体が差異のただなかでも、生きていく (co-living) ことの責任／応答力とリスクへ託されることになっている。地球上の地域や人々の間の裂け目が日増しに深刻化していくにつれて責任／応答力の場はますます

ここでは、「脱自然化 (denaturalization)」と「文化・化 (culturalization)」のなかで生起するコンフリクトについて論じられる。具体例をあげれば、「身体的経験を生きる (experiencing the living body)」代わりに、医学的診断、解剖図、生理学的図式などの科学的カテゴリーの認知フィルターが重ね合わされ、上書きされる。身体を「操作」する力は増大しており、「内なる惑星」が「植民 (colonizing)」の対象となっている。

しかしもし、内なる自然である身体と対話し、声を「聴く」ことを選択し、「内なる惑星」を「創る」ことに取り組むのであれば、「身体における人間の経験の根源性 (rootedness of human experience in the body)」は、極度に文化・化 (overculturalized) した社会システムに変化をもたらす潜在力を秘めてもいるのだとする¹⁸⁾。

こうして私たちは、自らの、すでに「脱自然化」「文化・化」してしまった「自然」を決定する必要性に向き合う存在となり、新たな“責任／応答力”が求められている¹⁹⁾。すなわち惑星社会／内なる惑星への“責任／応答力 (responsibility)”である。

本論文では、「内なる惑星」概念が提示され、その“地 (terra)”で生じている人間と社会の“根本問題”についての指摘がなされていた。この論稿のもととなっている『プレイング・セルフ——惑星社会における人間と意味』においては、「第4章 内なる惑星」と「第5章 境界としての身体、身体メッセージ」「第9章 地球に住む」などの章で、この問題が論じられている。以下では、『プレイング・セルフ』における推論をたどっていくこととしたい。

3. エコロジーと「内なる惑星」

『プレイング・セルフ——惑星社会における人間と意味』「第4章 内なる惑星」では、エコロジーはいかなる意味でイシューであり“根本問題”であるのかについての考察が展開される。

グローバル社会で生起する地球規模のイシュー (global issues) である「エコロジーに関するイシューは何よりも、システムの問題 (systemic problem)」である。すなわち、エコロジー問題は、表層の背後に地球規模の相互依存という現象があることを明らかにして、人間の意識と行為に新しいフロンティアを生みだす。「私たちはシステムに属するのであり、そこでは原因が循環しあうので、私たちの認知パターンや予測を再構成することが必要となる。」²⁰⁾

「システムの問題」に応答するためにはシステム論的アプローチが必要となる。「システム論

ます個人の行為へとシフトしてきている。生態系の存続は私たちの自覚的な選択にかかっている。まさにこの理由から内なる惑星が私たちにとって決定的な事柄となるのである。内なる惑星は私たちを最も内奥で規定し私たちの一部であり私たちを外なる宇宙へ導く道なのである。

18) Melucci 1997, 65 頁, 67 頁.

19) Melucci 1997, 69 頁.

20) Melucci 1996 = 2008, 82 頁.

的アプローチ」は、「枠」を設定し、外部と内部に分け、その「枠」のなかで閉じた「解」を求める「要素還元主義的アプローチ」ではない。それぞれのレベル（物質、生態系、生命、人間社会、等々）における要素間の関係と相互作用の動態として、人間と社会を捉えるアプローチである²¹⁾。

エコロジーはまた、人間の行為の文化的次元 (*cultural dimension*) とかかわる。私たちの行為を方向付ける文化の次元で、「社会関係、象徴システム、情報の循環に働きかけることなしには、生存可能な未来は想像できない」し、事物への働きかけは、(文化の)コードに左右される。さらには、「集団や、階級、国家の一員としての個人に対してではなく、個人としての個人 (*individuals qua individuals*) に対して影響を及ぼす。」²²⁾

すなわち、前章で言及した自然の「脱自然化」「文化・化」とかかわって、「エコロジー」という「枠」で現実を捉えるに際して、文化のコードそのものを変えるという自覚的な回路なしには、イシューの背後の「問題」への応答はなし得ない。そして、問題への応答をするのは、「個人としての個人」のリフレキシヴな小さな行為である。

加えて、「利害や文化の差異化、人間行為の恒常的な条件としての不確実性」は、「コンフリクト (*conflict*)」を生ぜしめる。ここでは、「共存 (*coexistence*) の基準の再定義」「差異、可能性、制約を可視化し、交渉できるようにする努力」が必要となる。コンフリクトについては、前章で取り上げた論文である“The Social Production of Nature”においても論じられており、「取り除くことができないもの」と認識したうえで、コンフリクトとの「共存」が必要になるとする²³⁾。

メルッチは、「内なる惑星」をどのように理解し、叙述していたのであろうか。ここでは、「内なる惑星」が「征服の地」となったという観点から述べられている。すなわち、認知科学や脳科学の発達によって、「私たちの行為の力はその生産物から相対的に独立し、自分自身の自然に働きかける純粋にリフレキシヴな力へと転換し」、「内なる惑星に居住するだけでなく、内なる惑星を創り出し」、「能動的にその境界線を引き直し、その内部の地形図を作成する」こととなった。私たちの「自律的な行為の潜在能力」「個体化の潜在力 (*potential for individuation*)」が増大すると同時に、「内なる惑星の植民地化」がすすんでいく。「潜在力」の増大と「植民地化」が同時にすすむ「場 (*place, space, site, case, circumstance, moment, condition, situation*)」が、「内なる惑星」である。

そこでは、近代科学の還元主義的モデルとは異なる全体論的なモデルが必要となり、「内な

21) 地球科学の立場から人間と社会を捉えることを試みた『社会地球科学』では「要素還元主義的アプローチの限界」と「システム論的アプローチの必要性」が説かれている。松井孝典「人間圏とは何か」鳥海光弘・阿部勝征・住明正・鹿園直建・井田喜明・松井孝典・平朝彦・青木孝『岩波講座 地球惑星科学 14 社会地球科学』岩波書店、1998年、1-12頁。

22) Melucci 1996 = 2008, 83頁。

23) Melucci 1996 = 2008, 84頁。

る惑星」はもはや、「様々なレベル及びシステムが接触する接合部である」。身体もまた、「媒体としての身体」であり、心を「体現 (embody)」し、「私たちがまるごと統一された存在であることを可能にするもの」²⁴⁾となる。

「内なる惑星は、身体と言語が行動と再帰性の間で出会う点であり、天と地の結び目、連結点である」。私たちはまだ、「私たちの内なる風景の中の最もアクセスしやすいフロンティアを探究し始めたにすぎない」のであり、「内なる惑星」は、「開かれて在ること、言葉を宙づりにすること、現在のなかで待つこと」への探究を呼びかけているのだとしている²⁵⁾。

私たちは、「グローバルなフィールド」への「介入」の全面展開によって、惑星地球 (the planet Earth) と身体 (corporeality) の存在を、社会的現実として意識化し、自覚するような惑星社会を生きることになる。惑星社会論は、この状況が“生身の現実 (realtà cruda, raw reality)”となった「時代の転換期 (passaggio d'epoca)」²⁶⁾への問題提起である。

「内なる惑星」は、「外にある／外なる惑星」との対比で表象された対自的存在であり、身体と言語の連結点、個々人のリフレクシヴな行為の結び目となっている。

4. 身体のシグナル、メッセージを聴く

ここで問われるのは、「内なる惑星」と身体との関係であるが、『プレイング・セルフ』第5章では、「境界 (限界, limit) としての身体、身体のメッセージ」として、身体から発せられるメッセージを「聴く」という観点からの展開がなされる。すなわち、「身体は、それが聴かれ、解読され、そして応答されるべきメッセージである。身体は語る、しかしそれは公的な場で人目につくことを通じてだけでなく、数々のシグナルを通じて私たちのひとりひとりがお互いに直接個人的に語る」「責任／応答力へと通ずる道として、応答の仕方を示すために、身体は聴かれる」²⁷⁾のである。

ここでは、社会の大きな変化を個々人の身体が察知し、シグナル、メッセージを発するという理解、それぞれの身体の奥底からの声を聴くことを通じて、惑星社会の“根本問題”に応答する、応答するために聴くという二重性と循環²⁸⁾について語られる。すなわち、「身体のシグナルは、取り外し不可能な実存の時計であり、私たちは生きているが有限であること、有限でありながら生きているということを告げている」²⁹⁾のである。

24) Melucci 1996 = 2008, 85-87 頁.

25) Melucci 1996 = 2008, 96 頁.

26) Cf. Alberto Melucci, *Passaggio d'epoca: Il futuro è adesso*, Milano: Feltrinelli, 1994.

27) Melucci 1996 = 2008, 101 頁.

28) 聴くことの二重性と循環については前出の「聴くことの社会学」で述べている。ここでの「他者の声」は自らの身体の声でもある。Melucci 2000 = 2001, 7-8 頁.

29) Melucci 1996 = 2008, 108-109 頁.

しかしながら、私たちは、身体の声、シグナル、メッセージを「聴くこと」の困難に直面している³⁰⁾。ストレス、癌、エイズ、汚染に関連した病、見境なく薬を消費することによって引き起こされた医原病など、社会に関連した病理の新たな形態が出現している。“社会的痛苦／痛み (doloris ex societas/patientiae, pain on society/patience)”の“受難者／受難民 (homines patientes)”となった私たちは、「自分たちの身体の実際の出来事と全く異なる基準に従って、健康か病気を定義されるという介入」に直面している。「聴く」ための時間・空間、“場”から著しく疎外され、惑星社会の根本問題に、身体性から遠ざけられた「個人」として対峙し、困難な状況とたたかわざるを得なくなっている。

しかし、それでもなお、惑星社会の根本問題への応答は、「身体シグナルを聴きそれを読みとる力、身体の限界と潜在力とを認識する力にかかっている。」「医学が持ち出してくる無菌の身体に対して、私たちは、ただ生身の身体を存在せしめることができるだけなのであり、そのためにまず、その生きている身体が発する言語を学ばなければならない。」「自覚と親密さが内側に宿っていない身体は、簡単に外的操作の対象となる。身体が発する言語に親しみ、いつもそれと何らかの対話をしているような身体ならば、器官と装置の寄せ集めに還元されにくくなる。」³¹⁾

「聴くこと」は、ただ発せられた言葉を聞く、ましてやデータを計測することだけではなく、身体シグナル、メッセージ、言語を学び、親しみ、対話をしていくなかでしか成立しない³²⁾。

ここでの考察から、対自化された存在である「内なる惑星」に対し、身体は即自的存在であり、ふだんはその存在を意識していないが、生老病死のような個（体）としての危機、すなわち「自らの自然の根源 (its own natural root)」 「身体における人間の経験の根源性 (rootedness of human experience in the body)」 とかかわるとき、その声はどう聴かれるのかが問われることになる。それゆえ、身体は、「自らの自然の根源 (its own natural root)」であり「人類の物理的社会的な生息地」なのであり、惑星地球と同じく〈惑星社会／内なる惑星〉を創り直していくための「ホーム」である。“素 (elemento)”であり“地 (terra)”なのである。

30) 聴くことの困難については2000年5月の日本での講演で述べている。Melucci 2000 = 2001, 9-11頁。

31) Melucci 1996 = 2008, 111-112頁。

32) 身体の声、シグナル、メッセージを「聴くこと」の膨大な営みは心理学博士でもあったメルッチの精神心理療法的実践と臨床心理学者のアンナ・メルッチ夫人との協業でなされた“療法的でリフレクシヴな調査研究 (ricerca terapeutica e riflessiva)”の成果に示されている。Alberto Melucci, *Corpi estranei: Tempo interno e tempo sociale in psicoterapia*, Milano: Ghedini, 1984; Alberto Melucci e Anna Fabbrini, *I luoghi dell'ascolto: Adolescenti e servizi di consultazione*, Milano: Guerini, 1991; Alberto Melucci e Anna Fabbrini, *L'età dell'oro: Adolescenti tra sogno ed esperienza*, Milano: Guerini, 1992; Alberto Melucci e Anna Fabbrini, *Prontogiovani: Centralino di aiuto per adolescenti: Cronaca di un'esperienza*, Milano: Guerini, 1993.

5. 「内なる惑星」に住むことの“責任／応答力” ——ジレンマを名付ける

「第9章 地球に住む」においては、〈惑星社会／内なる惑星〉、〈惑星地球／身体〉というメルッチ固有の概念装置による現代社会認識を展開している。メルッチの論稿では、常に冒頭部分にエッセンスとなる言葉が置かれているが、第9章も同様のつくりとなっている。

自然に関する言説は、今や私たちの日常生活のあらゆる局面に侵入しており、複雑性をもたらすジレンマの存在を明らかにすると同時に隠蔽している。エコロジーは、環境問題と共謀する形で、自動車から離乳食に到るまであらゆるものを市場にのせることで、当世流行りの地位にのしあがったが、まさにこの現象のもつ特異性がそのものの背後にあるものを明らかにしている。環境問題に関する論議はひとつの徴候であり、その背後にある何かを明らかにせよという警鐘でもある。そうだとするならば、それは、グローバル社会のホームである地球に住む人々に、今、何を伝えようとしているのだろうか³³⁾。

ここで問われているのは、「グローバル社会のホームである地球に住む」という認識を必要とするようになった現代人における、言説の「徴候 (symptom)」の「背後にある何か」である。その「何か」は、「私たちの生活の特徴づけている重大なジレンマ」として捉えられている。「自然」「環境問題」「エコロジー」に関する言説の「侵入」が指摘され、そのうえで、このイシューについての議論が、「ジレンマ」の存在を「明らかにする」と同時に「隠蔽」することのアンビヴァレンス (ambivalence) についての考察が深められている。

私たちは、「解決不能問題に直面し」ている。「見かけ上の解決策が不確実性をただ別のところに移すだけだとしても、必ずや解決せねばならぬ問題であり続ける。それゆえ、これらの問題に対して私たちが講じる対処法は、絶えざる意志決定しかない。しかし決定はまた、日増しに耐え難くなる緊張を回避しようとする方途にもなり、私たちに課されているジレンマを虚構で固め、それらを名付けようとする努力を妨げるものともなる」³⁴⁾。

「解決」せよと要請され、「両極に対立するものからどちらか一方を選択せよ」というありえない要求」が突きつけられる。「選択」による「解決」とはならず、「選択」は、問題を直視することを「回避」する方策として、「絶えざる意志決定」による問題の先延ばしがなされるだけとなる。メルッチは惑星社会の根本問題として、下記のジレンマをとりあげている。

・自律性 (*autonomy*) と管理 (*control*)、個人の「選択」と行動の管理・制御との間の

33) Melucci 1996 = 2008, 173 頁.

34) Melucci 1996 = 2008, 174 頁.

ジレンマ

- ・「システムへの介入」の全能 (omnipotence) 感と内外の自然からの制約への責任／応答力 (responsibility) とのジレンマ
- ・科学的知識によってもたらされた知識の不可逆性 (irreversibility of knowledge) と選択の可逆性 (reversibility of choices) との間のジレンマ
- ・文化の異質性や多様性に対する包摂 (inclusion) と排除 (exclusion) のジレンマ³⁵⁾

「これらの重大なジレンマが直ちに命名されることなどめったになく、「私たち一人一人の生活や種の宿命、未来の進化の行方に直接影響を与えるような多くの争点を、議論や管理の場から取り除いてしまっている」³⁶⁾。しかし、ここで求められているのは、「どちらか一方の選択」ではない。何かの「選択」によって「解決」という処方箋は機能しない。

私たちに必要なのは、「二極間の緊張」そのものを捉え、「名付けようとする努力」である。なぜなら、「その背後にある何か」は、「惑星システムの不安定な均衡それ自体を支えつつ、新たにつくり変える糸を紡ぎあげている」³⁷⁾からである。

それゆえ、メルッチは、まだ名付けられていない、二分法でもどちらか一方の選択でもない「緊張関係」「アンビヴァレンス」「ジレンマ」「コンフリクト」がもつ“衝突・混交・混成・重合の歩み (percorso composito, composite route)”を、“対位的 (contrapuntal, polyphonic, disphonic)”に、playing&challenging に捉え、表現することにチャレンジした。

英語版の主著である『プレイング・セルフ (The Playing Self: Person and Meaning in the Planetary Society, New York: Cambridge University Press, 1996)』と『チャレンジング・コード (Challenging Codes. Collective Action in the Information Age, New York: Cambridge University Press, 1996)』に、それぞれ playing と challenging というタイトルを冠したことから、その思想の一端を読み取ることが出来る。惑星地球規模の社会が直面する“根本問題”への応答は、「ごくふつうのひとびと (la gente, uomo della strada, ordinary simple people)」である個人が“(軸足をずらし) 揺れうごきつつかたちを変えていく (playing and changing form)”ことにあると考えていた。

このような試み——「生命体としての地球が抱えている問題」への応答が、「この時代の重大なジレンマと対峙するような新しい見方を、私たちが取ることができるかどうかにかかっている」³⁸⁾のだとしたら、「新しい見方」とはいかなるものだろうか。

35) Melucci 1996 = 2008, 174-175 頁.

36) Melucci 1996 = 2008, 175 頁.

37) Melucci 1996 = 2008, 174 頁.

38) Melucci 1996 = 2008, 176 頁.

6. おわりに —— 惑星社会の劇的収支決算による債務相続者の学問へ

メルッチは、現代社会の“根本問題”を考えるには、「問題のなかに予め答えが含まれているような問題解決だけではなく、新たな問いを立てることに私たちの創造的な力を向けること」が必須であるとしている³⁹⁾。それゆえ、本稿のおわりとして、ここまで検討してきたメルッチの概念装置の「布置連関 (constellation/costellazione)」を確認し、「新しい見方」への“問いかけ”をおこないたい。

〈惑星社会／内なる惑星〉〈惑星地球／身体〉の布置連関

- (1) 外部にある自然, 「外にある／外なる惑星」を保護・保全 (操作) するという思考態度 (mind-set). 「外なる惑星」という表象 (対自的存在としての「外なる惑星」).
- (2) 内部にある自然である「身体」, 「内なる惑星」もまた操作するという思考態度 (mind-set). 「内なる惑星」という表象 (対自的存在としての「内なる惑星」). ここでの「惑星／身体」は, 文化の範疇, 言語によって捉えられた「表象」である).
- (3) 人類の物理的社会的な生息地である惑星地球 (即自的な存在).
- (4) 人類の物理的社会的な生息地である身体 (即自的な存在).

私たちは、自分たちの外部にある自然として表象する「外にある／外なる惑星」を、精神もしくは頭脳 (その延長にある科学技術) によって「保護・保全 (操作)」する、さらには、人間内部にある自然としての「身体」, 「内なる惑星」もまた「操作」するという思考態度 (mind-set) をもっている。ここでの「外なる惑星」とは、文化の範疇, 言語によって捉えられた「惑星」, 対自的存在としての「外なる惑星」である。「内なる惑星」は、「外なる惑星」の対概念としての表象であり、対自的存在としての「内なる惑星」である。

「操作」とのかかわりでは、メルッチは、今日まで社会を解釈する方法として私たちが依拠してきた「近代性 (モダニティ)」に関する二つのパラダイム——一つは資本主義社会というパラダイムであり、いま一つは産業社会というパラダイム……これらを用いるだけでは、もはや私たちが目撃している社会を十分に理解することはできない。……私たちが語っている社会がどのようなものなのかは誰にもはっきりしない、ということを明言した方が、いいのではないかと述べていた⁴⁰⁾。

39) メルッチの「問題解決」とは異なる「問い」と「創造的プロセス (the creative process, il processo creativo)」の意味についての記述は、Melucci 1996 = 2008, 196 頁を参照されたい。

40) Alberto Melucci, *Nomads of the Present: Social Movements and Individual Needs in Contemporary Society*, Philadelphia: Temple University Press, 1989 (= 山之内靖・貴家嘉之・宮崎か

これは、1980年代になされた稲上毅の指摘——「人間自然をふくめた自然を、作為の対象、事実上かぎりなく可変的なものとみなしてきた」近代社会、「オープンエンドの移転（移動）と可逆性（可変性）への信条」「（進化主義パラダイム）を持つ近代思想は、修正と補足を余儀なくされている」という指摘ともつながる⁴¹⁾。

ヨハン・ガルトゥング（Johan Galtung）もまた、開拓し搾取すべき「外部」——「原野」「荒野」「フロンティア」がなくなることによって没落していったローマ帝国への道を避けるために、高い生産性を科学技術革命によって確保しつづけるという近代社会の「処方箋」の背後の「知的様式」の問題を指摘した。すなわち、①中心と辺境という空間概念、②進歩や成長の概念（時間概念）、③知識の概念化（複雑な問題を操作可能な単位にまで「X-Y関係」に還元し、演繹関係に基づく知的ピラミッド造り）、④人間と自然との関係における人間中心主義、⑤白人・男性の優越、全体主義、⑥普遍的かつ排他的な超個人、唯一絶対神というプログラム、すなわち、「成長の観念、知識体系化の方法、自然との関係を組み立てていくやり方（the idea of growth, the way we organize our knowledge, the way we organize our relation to Nature）」や「他の民族、他の性、他の年齢集団との関係を組み立てていくやり方（the way we organize relations to other peoples, to the other sex, to other age-groups）」と、西歐的宗教への信条との間には、「内的一貫性（an inner consistency）」が存在しているとの指摘である⁴²⁾。

では、地球規模の限界（planetray boundary）を知覚・把握し行為する人間の知のパラダイムの創り直しは、どのようにすすめていくことができるのか？ 表象された「外なる惑星」「内なる惑星」に対して、〈惑星地球／身体〉の存在が対置されている。その存在を知覚し全景把握することは困難であるが、惑星地球——人類の物理的社会的な生息地——は、即自的に存在する。

すみ訳『現在に生きる遊牧民：新しい公共空間の創出に向けて』岩波書店、1997年、vii頁）。メルッチ、そして稲上毅とヨハン・ガルトゥングによるパラダイム転換の指摘については、新原道信「序章第2節 なぜいま社会科学を“惑星／地球／社会”から始める必要があるのか」新原道信・宮野勝・鳴子博子編著『地球社会の複合的諸問題への応答の試み』中央大学出版部、2020年、5-9頁で論じている。

41) 稲上毅は、これまで「社会発展の弱い外生変数とみなされてきたものがいま改めて重要な内生変数として強く意識されはじめ」ており、現代社会は少なくとも四つの視点（①地球社会化の進展、②非移転-不可逆性 [= 性年齢人種 etc.] の比重増大、③人口爆発と高齢化、④自然-生態系と「限界の原理」）についての配慮を欠くことは出来ないとした。これは今日の視点からするなら、惑星社会化／ジェンダー・エスニシティ・エイジング／人口問題／プラネタリー・バウンダリーといった 이슈ーについての先取りであったと考えられる。稲上毅「現代社会論」佐藤守弘他編・北川隆吉監修『現代社会学辞典』有信堂、1984年、84頁。

42) Johan Galtung, “Sinking with Style”, Satish Kumar (edited with an Introduction), *The Schumacher lectures*. Vol.2, London: Blond & Briggs, 1984 (= 耕人舎グループ訳『シュマッハーの学校——永続する文明の条件』ダイヤモンド社、1985年、18-23, 25頁)。Cf. Johan Galtung, *Globalization and intellectual style: seven essays on social science methodology*, 2003 (= 矢澤修次郎・大重光太郎訳『グローバル化と知的様式——社会科学方法論についての七つのエッセー』東信堂、2004年)。

身体は、「私たちの内なる自然と私たちを取り巻く自然の境界 (confine) を縁取」⁴³⁾る即自的存在であり、「自然から切り離された存在」であることと「自然に引き戻される (restored to nature through our bodies)」ことの二極の間に在る“境界領域 (cumfinis)”である。

人間の時間と空間は、私たちが、地球という惑星とそれをこえて広がる宇宙の一部を形づくっているのだという自覚 (awareness) において、分かち難く緊密に絡み合ってくる。人類は、地球に住むこと責任／応答力、そして種を破滅に導くような生産物に対して、絶対に侵犯してはならぬ境界を定めるという責任／応答力を引き受けねばならない。人間の文化は、存在しているものは何であれ、ただ存在するという理由のみによって静かに尊重されるようなテリトリーを、今一度確保すべきである。どのような人間社会も、そのような領域をそれぞれ独自の仕方認めてきた。今や、自らを創造する力と破壊する力をも獲得した社会は、そのようなテリトリーを自ら定義し直さなければならない⁴⁴⁾。

生身の身体と対話すること、声を「聴くこと」「自然に引き戻される」ことによって、「絶対に侵犯してはならぬ境界を定め」ようとしていくしかない。かつては、“ただ存在するという理由のみによって静かに尊重されるテリトリー (the territory where silence and respect are)”は、等身大の地域小社会であり、「地域主義」から始めることも可能であった⁴⁵⁾。しかしいまや、「テリトリー」の圏域は、地球規模となってしまっている。かつて、都市は「出会いの場」であり、“異質性を含み混んだコミュニティ (comunità composita con eterogeneità, composite community with heterogeneity)”を希求する場であった⁴⁶⁾。しかし、その都市は、地球規模の「操作」⁴⁷⁾と都市的病の「闘技場 (arena)」となり、あらためてその役割を捉え直し、地球規模の“異質性を含み混んだコミュニティ”を構想する必要に迫られている。

「テリトリーを自ら定義し直す」という「感性的人間的営み、実践 (sinnlich menschliche Tätigkeit, Praxis)」を、惑星地球と身体という“舞台裏 (retroscena)”を「自覚」しつつ、〈惑

43) Melucci 1996 = 2008, 180 頁。

44) Melucci 1996 = 2008, 176-177 頁。

45) Cf. 玉野井芳郎『エコノミーとエコロジー —— 広義の経済学への道 [新装版]』みすず書房, 2002 年, 玉野井芳郎『生命系のエコノミー —— 経済学・物理学・哲学への問いかけ』新評論, 2002 年。

46) 「出会いの場」としての都市については、新原道信「出会いの場」としての都市」横浜国立大学都市科学部編『都市科学事典』春風社, 2021 年, 166-167 頁を参照されたい。

47) 「惑星規模に広がる都市化 (Planetary Urbanization)」(ニール・ブレナー, Neil Brenner) により地表地下流域大洋大気圏といった空間を含む地球全体の「操作」がおしすすめられていることについては、ニール・ブレナー『新しい都市空間 —— 都市理論とスケール問題』法政大学出版局, 2024 年および、平田周・仙波希望編著『惑星都市理論』以文社, 2021 年などを参照されたい。

星社会／内なる惑星〉を“舞台 (arena/scena)”として、ごくふつうの個人の行為から始められねばならない⁴⁸⁾。

プログラムを生み出す「内なるプログラム」を創出した人間は、社会というシステムを“発明”し、生物としての自らの閉じた定常系のシステムを破壊／革新するというアンビヴァレンス (ambivalence) を抱えてきた。「グローバルなフィールド」での可能性を全面展開した結果、もはや「成長の限界」をこえ、「成長という限界」を問題とする段階に達した⁴⁹⁾。

私たちの生身の身体 (corporeality) は、人間の諸活動の生産物として“造り出された廃棄物 (invented refuse)”，“廃棄物の反逆 (rivolta dei rifiuti, revolt of refuse)”に直面し、プラスチックや PCB などの化学物質，放射能，そして感染症への耐性を試されている。私たちの身体は、すでに造り出された物質，過去の「豊かさ」を支えた物質がもたらす「劇的な収支決算」⁵⁰⁾の債務相続者となっており，この「債務相続」は，何世代にもわたって，他の生物も含めて続いていく。私たちは，いわば“惑星社会の劇的収支決算による債務相続者”である⁵¹⁾。

しかし，このような〈惑星社会／内なる惑星〉の「変化に対する責任と応答を自ら引き受ける自由 (a freedom that urges everyone to take responsibility for change)」⁵²⁾，その「限界を受

48) メルッチは“[何かを] 始める (beginning to)”について以下のように述べている。

それゆえ私たちが学ばなければならないのは身体と言語との間を移動することあるいはむしろ世界を名付けるのに私たちが用いている異なった言語の間をしなやかに変化を喜んで受け入れ，限界を尊重しながら移動することを学ばなければならない。私たちの選択を導く判断基準や価値観はもはやいかなる安定した基盤も持たない。こんにち私たちがなす唯一のことは，この世界が構築された性格をもつものであることとこの世界の境界は一時的なものであることを認識しつつ私たちの世界をともに産み出す (*produce together*) ことだけだ。(Melucci 1996 = 2008, 181-182 頁)。

49) 「成長という限界」については，梅棹忠夫・小長谷有紀編『梅棹忠夫の「人類の未来」暗黒のかなたの光明』勉強出版，2011年，安部公房『死に急ぐ鯨たち』新潮社，1986年などを参照されたい。

50) 「劇的な収支決算」としての“生体的関係的カタストロフ (la catastrofe biologica e relazionale della specie umana)”は，2000年5月のメルッチの日本での講演での言葉からきている。Alberto Melucci, “Homines patientes. Sociological Explorations (Homines patientes. Esplorazione sociologica)”, presso l'Università Hitotsubashi di Tokyo, 2000 (= 新原道信「A. メルッチの“境界領域の社会学”——2000年5月日本での講演と2008年10月ミラノでの追悼シンポジウムより」『中央大学文学部紀要』社会学・社会情報学20号(通巻233号), 2010年, 51頁において抄訳)

51) “惑星社会の劇的収支決算による債務相続者 (eredi del debito a causa di bilancio drammatico della società planetaria, heirs to debt due to the planetary society's dramatic balance)”については，新原道信「“フィールドに出られないフィールドワーク”という経験——惑星社会の諸問題に応答する“うごきの比較学”(2)」『中央大学社会科学研究所年報』25号, 2021年, 45-78頁を参照されたい。

52) 「変化に対する責任と応答を自ら引き受ける自由 (a freedom that urges everyone to take responsibility for change)」については，新原道信「変化に対する責任と応答を自ら引き受ける自由をめぐる——古城利明とA.メルッチの問題提起に即して」『法学新報』115巻, 9・10号, 2009年3月, 697-722頁を参照されたい。

け容れる自由 (free acceptance of our limits)⁵³⁾をもとうとするのであれば、私たちにも出来ることはあるとメルッチは考えた。

私たちは、種へ、すべての生きとし生けるものへ、宇宙の秩序へと私たちを結びつけるあらゆる糸に編み直されていくことになるだろう。そうすることで、私たちは、人類の運命と未来の世代に対して、私たちひとりひとりが背負う固有の責任／応答力を認識しうるのであり、それに伴い、他の種や、人間もその一部であるところの宇宙に対して、失いかけていた畏怖の念を取り戻していこう。そのような認識は、複雑／複合システムから成る科学技術の文化に伝統的文化が託した智慧のすべてを、ひとつの根本的な遺産へと凝集している。すなわちその遺産とは、私たちが、存在する全ての事物に対して驚嘆の念を持ち続けることが可能である、ということである⁵⁴⁾。

「地球 (Earth, globe)」は、この宇宙のなかにあまた存在する「惑星 (planet)」のひとつでしかない「惑星地球 (the planet Earth)」である。この“惑星社会論的な転回 (Revolution from a vision of planetary society)”⁵⁵⁾によって、人間中心主義、地球中心主義から離れて、惑星社会と人間、「惑星地球における生」を捉え直す。そして、惑星地球の大気圏、水圏、地圏を母体として存立する生物圏、そのなかの人間圏のすべての「網の目」のなかに存立する「ただ存在するという理由のみによって静かに尊重されるようなテリトリー」を構想していく。

「新しい見方」としては、「鳥の目／虫の目」を“組み直す (recompose/reassemble)”ことが必要となる。大気圏、水圏、地圏を母体として存立する生物圏、そのなかの人間圏——人間／動物／植物／ウイルスの関係性から見る〈微生物の目 (microbiological) / 生物の目 (biological) / 生態系の目 (ecological) / 惑星の目 (planetary)〉による惑星社会／内なる惑星，“地域社会／地域／地”の学である⁵⁶⁾。

こうして、メルッチの〈惑星社会／内なる惑星〉〈惑星地球／身体〉論をひきつぐための“問

53) 「限界を受け容れる自由 (free acceptance of our limits)」については、新原道信「A. メルッチの『限界を受け容れる自由』とともに——3.11以降の惑星社会の諸問題への社会学的探求 (1)」『中央大学文学部紀要』社会学・社会情報学24号 (通巻253号), 2014年, 41-66頁を参照されたい。

54) Melucci 1996 = 2008, 182頁。

55) “惑星社会論的な転回 (Revolution from a vision of planetary society)”についてはメルッチの「地球に住む」および小松左京の「地球社会学」に着想を得ている。小松左京『地球社会学の構想——文明の明日を考える』PHP研究所, 1979年。

56) 〈微生物の目 (microbiological) / 生物の目 (biological) / 生態系の目 (ecological) / 惑星の目 (planetary)〉と本稿の“問いかけ”については、新原道信「“フィールドに出られないフィールドワーク”という経験——惑星社会の諸問題に応答する“うごきの比較学” (2)」『中央大学社会科学研究所年報』25号, 2021年, 45-78頁を参照されたい。加えて、地球／生物／人間の「悲鳴」については、

いかけ”は、以下のようなものとなる。

“宇宙という大海のなかに浮かぶ塵の一つのような惑星地球, その惑星地球をひとつの「多島海」として, 社会をそのなかに浮かぶ島々として体感するような“智(cumscientia)”——地球規模の複合的諸問題に応答する“臨場・臨床の智”をいかにして表し出す(hervorbringen)のか? 地球の, 他の生き物の, 他の人間の悲鳴を感知し, 感応する“共存・共在の智”をいかにして創り出す(create)のか?

新原道信「フィールドワークの“想像／創造力”——惑星社会の諸問題に応答する“うごきの比較学” (3)」『中央大学社会科学研究所年報』26号, 2022年, 31-57頁も参照されたい。

